

児童養護施設の子どもに対する学習支援の現状と課題

坪井 瞳 (浦和大学)

■問題の所在

児童養護施設(以下、施設)は、虐待や保護者との死別・離別などの事情により家庭で暮らすことのできない子どもを保護する児童福祉施設である。入所の理由は、保護者からの虐待がトップを占めており、近年では治療的なケアの必要性から心理職員や個別対応職員の配置を行い、心理的援助を重要視している。

施設にはおおむね2歳から18歳までの子どもが入所しており、最近では保護者が家庭復帰を望まず、在所年数の長期化・児童の高年齢化が進んでいる。以前は長期入所の理由は保護者の失踪・死亡等であったが、最近では保護者はいるが、虐待や経済的理由により養育環境として不相当との理由で長期入所の傾向がある。施設では、原則的に15歳以上の子どもは就学している場合を除き、退所することが児童福祉法で定められている。中卒後に就職・非進学・高校退学の場合は退所となるため、かれらにとっての中卒後の進路選択とは、保護された子ども期を延長できるか、または社会に放たれ自活の道を進むか、との選択が迫られる時期である。そうした意味でも、学力とはかれらの人生を左右する大きなファクターと言っても過言ではないだろう。

しかし、施設の高校進学率は87.7%(2006)に過ぎず、学校基本調査と比べ約10ポイントの差がある。大学進学率については9.3%であり、学校基本調査の47.3%に比べ約5分の1という低位にとどまっている。高卒就労という施設界の「常識」が未だに存在することは否めない。

また、低学力の実態もあり、西田(2011)はそのおかれた状況から「強いられ・放置された結果としての低学力」と述べる。また、首都圏A県の施設児童の進学先高校は、偏差値35~44のいわゆる学力困難校への進学が約6割を占めている(坪井、2011)。あわせて、特別支援教育を必要とする子どもも高い割合で存在し、特別な教育的配慮が必要な層であることがわかる。

学歴を獲得することが社会への参加条件になることが明らかな社会であるにもかかわらず、施設では「実はこの最優先課題が基本的な生活習慣の習得とか心理的ケアの陰に隠れて」おり「職員研修においても学習指導の重要性などの研修は全く無いと言っても良いのが現状である」と

施設の児童指導員である榊原ら(2005)が述べるように、学習支援に関しての基盤は未整備の状況にある。2009年より、国と自治体からすべての中学生の通塾に対して全額補助が行われているが、施設によっては中3のみに限定していたり、繁華街に出ることによって起きるトラブルや、塾の進度についていけないなどの理由から、通塾させていない施設も存在する。

そもそも、施設入所以前の養育環境による学習習慣や基礎学力の不足がある子どもが多く、学習に関しても特別な配慮を必要とする。しかし、学習については専門職員が配置されておらず・制度化されていないため、支援を必要としているにもかかわらず手つかずの状況である。

先行研究においても、施設における子どもの学力や学習支援についての研究自体あまり見当たらない。学習支援を通じて見られる子ども自身や支援者自身の変容(大塚、2011)、施設での学習支援改革の取組み(榊原、2005)、教員養成校の学生にとっての意義(戸田、2010)などがある。そこでは、おおまかに言う「学習の成果」が視座に据えられている。しかし、施設側の意識・制度について触れられているとは言えない。ただ、これらの先行研究において確認されることは、施設での学習支援は、ほぼボランティアによって担われているという実態である。こうした施設での学習支援体制の未整備をボランティアが担っているという実態の中で、果たして支援を行っているボランティアは、この状況をどのように捉えているのであろうか。本研究の枠組みは、「学習支援のボランティア」「施設」「子ども」の三者それぞれの立場へのインタビューを行い、そこから学習支援の現状と課題、施設における学習の位置づけを確認する。最終的には、学習支援体制への提言を行うことを目的としている。本発表では、その糸口として行ったボランティアへのインタビューの結果を報告する。

■方法と対象

以下の学生ボランティア2名に、学習支援の状況についてインタビューを行った。半構造化面接の形態を取り、以下のA児については学生Xから約90分、B児については学生X・Yから同時に約90分、計2回実施した。

<学生ボランティア・2名>

1. 学生 X : 大学院生 (教育系・M1)、学部生のころから施設の遊びボランティアサークルに所属、現在はそのリーダーを務める。塾講師のアルバイトを学部から継続。教員志望。
2. 学生 Y : 大学院生 (教育系・M2)、塾講師のアルバイトを学部から継続。教員志望。

<対象児・2名>

1. A 児 (当時中 3) : 学生 X が遊びボランティアで訪ねていた施設に入所。施設より高校受験対策での要請があり、学生 X が中 3 夏～高校受験までの約半年間、施設にて週 1 日の学習支援。
2. B 児 (当時高 3) : 学生 X・Y の大学そばにある施設に入所。施設長と大学教員が知り合いで、X・Y と他 1 名の (Z) 3 人が大学受験対策で要請を受ける。高 3 の 10 月～2 月の約 5 ヶ月間、学習支援を行う。施設と大学が近いため、B 児は放課後に自転車で大学に来る。X・Y・Z それぞれ学生から一対一、週 3 日ほどの学習支援。

■結果の概要

<一対一、スモールステップでの支援>

施設では、石を投げたり、ボランティアや職員に対して排他的な発言が見られたりと、気持ちが安定しにくく、人との関係が築きにくい子どももいる。今回学生ボランティアがかかわった A 児 B 児ともに「受験に向かう」という目標を共有していたため、関係性を築くことが活動の中心にはならなかったが、学習中にエスケープすることや一対一で関わらないと集中しにくいこともあった。また、意欲を保つためにスモールステップを導入した。

<塾講師は違う、メンターのような存在>

上記の子どもの特徴を踏まえると、子どもに対して受容的かつ対話的に向き合うことが求められている。学生 X・Y とともに、アルバイトをしている塾では成績向上や志望校合格ということが優先されるが、学習支援ではまず勉強に向かう姿勢を作ることを優先した。大学構内で勉強を行うことで大学生活を身近に感じられるような配慮や、休憩中に大学構内を散歩しつつお互いの近況について話したり、「等距離の関係」を意識してかかわったという。また、ボランティアの持ち出しでお菓子や飲み物を用意し、気持ちを切り替えられるような配慮を行っていた。

<自由意志での参加、実は不安定な関係>

子どももボランティアも自由意志での参加である。子どもは、施設内のある年長児童の姿

から「ああはなりたくない、勉強してちゃんと進学する」という思いが学習を継続する動機にあり、A 児 B 児ともに「進学したい、志望校に入りたいなどの明確な意識を持っていたからこそ、ボランティアも意識を共有して進められていた。特に何も縛りのない関係であり、どちらかがドロップアウトしてしまったら、支援は継続できなかつたであろう。

<資源や理解の不足の中で、探索的に>

必要な参考書などを施設側が購入する金銭的余裕の無さや、学習用の部屋が無かったりなど、教材や環境の不足がある。また、職員自身が多忙であり、学習支援自体への関心が低いという状況が見られる。X・Y とともに、学習の進捗状況や普段の子どもの姿などの情報共有の時間をもちたかつたが、叶わないままに支援が終了した。そのため、「これでいいのか?」と自問自答しつつ、手探りの状態だったという。

<子ども理解と関係構築が求められる役割

教員志望や児童福祉への関心のある学生が参加している。報酬はないが、子どもの変化、気持ちを通じ合うことや子どもへの理解が及ぶことが参加継続のモチベーションとなっている。継続的に関わっていると、子どもの個人的な境遇や施設での生活の話も出てくるという。友人でもなく、兄弟でもなく、教員でもない、あくまで学習ボランティアとしての関係を保つため、「引きすぎず・深入りしすぎず」の関係が築けることが求められている。

■考察

以上の結果を概観すると、きめ細やかに子どもの姿を捉え、子ども自身の心情・意欲・態度を育てることをベースとして学習が行われている過程が伺われる。また、支援はすべてボランティア自身でマネジメントせざるを得なかつた。上述の戸田らの調査では、学生ボランティアが活動の後に振り返りをする中で、活動の意味付けがなされ、次に生かされるということが明らかにされている。しかし、かれらは職員・ボランティア同士でも情報交換する機会が持たず、探索的に支援を行ってきた経緯から、孤立した状況に置かれていることが推察される。

ボランティアは教育実習と異なり、制度化されていない。事前・事後指導等もなく、ボランティアの善意と良心によって行われている。こうした事実からも、これら学習支援は、非常に不安定な状況から成立していることが明らかとなった。施設における学習支援が制度化され、適切な人員配置が必要であると言えよう。